



ニュース

サイト・テクノロジスト地位確立の第一歩

細胞診スクリーナー養成所開校

去る5月6日、わが国で初めて細胞診スクリーナー教育の専門機関として、その養成所が東京と大阪に同時に発足した。大阪は大阪成人病センター内に設立されたが、ここでは東京の癌研究会（豊島区）内に開校した癌研究会付属病院付設細胞診スクリーナー養成所の開校式の模様を紹介しよう。

× × ×

開校式は午前10時半から始まり、厳しい試験に合格した10名の入学者は、やや緊張した面持ちで式に臨んだ。北は北海道、南は浜松から集まった、検査経験2～9年、細胞診経験0～1年の技師たちである。癌研病院長・黒川利雄氏のあいさつのあと、所長の増淵一正氏（癌研婦人科部長）は、パパンコロウ（米）の子宮癌細胞診の確

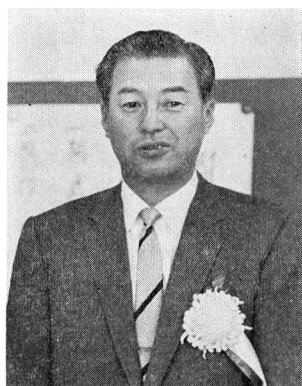
立に始まる細胞診の歴史を語るなかで、「日本では癌年齢（婦人）の検診率がわずか1%であるのに対し、先進国では60%です。需要が高いのに、cytotechnologistの受け入れ体制になっていないのが日本の現状です。」と開校の意義を述べるとともに、スクリーナーの地位確立を訴えた。このあと来賓の厚生省公衆衛生局・江間時彦氏、日本対癌協会・遠山孝氏、日本細胞診学会・福田保氏のあいさつがあり、正午に式は終了した。

× × ×

早期癌発見が強く要求される時世でありながら、発見に重要な役割を果たす細胞診技師が不足し、また、系統立った技師養成が今までなされていなかっただけに、生徒数10名、教育期間6カ月という規模の出発は十分とはいえないが養成所設立の全国の前駆けとなるだけに、その成果が注目されよう。「この教育は、マイクでやるわけにはいかず、どうしてもman to man方式で、実際に手をとってやらざるを得ない」という副所長の天神美夫氏（癌研婦人科副部長）の言葉の中に、この教育の目ざすところと、難しさがうかがえる。

講師陣は、癌研内の専門家の他に、東京およびその近くの細胞診のエキスパートが総計50名参加するという充実したものである。授業は日本臨床細胞学会が主催して作成したカリキュラムにそい、10月末日まで続けられる。

（文責・編集室）



写真上 開所式風景

写真下 所長の増淵一正氏